

## 新型インフルエンザについて

### 新型インフルエンザとは？

- ・ 鳥インフルエンザ（H5N1）の病原体ウィルスが「ヒト-ヒト感染」する型に突然変異し、人間にも感染するようになり、爆発的な流行を引き起こすインフルエンザのこと
- ・ 未知のインフルエンザウィルスのため、予知できない感染症を起こすと想定されている
- ・ 従来のヒト型ウィルスは、感染してもある程度は免疫が働くために重症化することはあまりないが、新型インフルエンザは、まだ免疫がないため大きな被害をもたらす可能性が高い
- ・ 新型ウィルスの出現パターンとして考えられているのが、水鳥のウィルスがブタやニワトリに感染を繰り返すなかで遺伝子変異が起きる例や、ヒトやブタの体内で鳥のウィルスとヒトのウィルスが混ざり合う場合などがある
- ・ 厚生労働省は、平常時から大流行するまでの感染の状況を6段階に分けている
  - 第4段階では国内での小規模感染が起こった場合
  - 第6段階では国内大流行時には国民の4人に1人が感染する状況（「パンデミック」）になっている
    - \* 現段階は第3段階
- ・ 治療薬としては、厚生労働省は抗ウィルス薬「タミフル」を2500万人分確保することになっている

### 想定される事態

#### 1. パンデミック（第6段階）になると全人口の半分以上が感染する

パンデミックになると全人口の半分以上に感染すると言われている。新型インフルエンザに感染しても全員が発症するとは限らないが、感染した人の半分以上（すなわち全人口の25%）が発症すると言われている。これはウィルスが未知のため、人間の体に免疫がないためである。

#### 2. 死亡率が高い

添付の厚生労働省資料にもある通り、インドネシアをはじめ各国で鳥インフルエンザ（鳥から人間への感染）による死亡例が報告されている。この表でも63.3%の方が死亡している。風邪とは異なる病気で、死亡する可能性のある感染症という認識を持つ必要がある。

過去にも「スペインかぜ」（「スペインかぜ」の項参照）という同じような新型インフルエンザが発生（90年前）しているが、スペインかぜで死亡した人は全世界で4千万人～8千万人とされている。WHO（世界保健機関）では影響度を勘案してか、死亡者の予想数値を発表していない状況にある。（感染学者の予想によれば全世界で1億8千万人～3億6千万人が死亡するとの予想もある）

#### 3. 人口密集度、人の移動が多いため、感染のスピードが早い

当時スペインかぜが流行したときよりは人口集中度が高くなり、人の移動も濃密になっている。したがって、感染のスピードはかなり早くなるのではと予想されている。

#### 4. 物流が止まる

国内の物流はもちろんのこと、海外でも多くの人が感染すれば物流も打撃を受けることが考え

られる。特に食糧の物流は、今の日本の食糧自給率を考えると大変な状況になるのではという警告も発せられている。

#### 5. 事業継続ができなくなる。

事業が継続できるかという問題がある。会社の業容によって取るべき対応は異なる（例えば、映画興行のような事業は行政の通達も出る可能性があって休業になるが、運輸事業（鉄道、バス）等はその公共性からどのような事態になっても事業は続けざるを得ない）ので、各社の事業の業容に応じた対策を取ることが重要になる。

#### 6. 意識の問題

これらのことに関する認識に対する意識の問題がある。新型インフルエンザについて知っている知らないでは命にかかわることであり、影響度は大きい。

人事労務担当者としては、新型ウィルスの知識と予防方法については、最低限従業員に周知徹底をする必要がある。

### 20 世紀のパンデミック（スペインかぜ）：中外製薬HPよりインフルエンザ情報

#### ・ 発生と流行の広がり

- 第1次世界大戦の最中、3波にわたり全世界を襲った
- 第1波は1918年3月に米国北西部で出現
- 米軍とともに欧州に渡り、西部戦線の両軍兵士に多数の死者を出して戦争の終結を早めたといわれている
- スペインの王室の罹患が大々的に報じられたことからスペインかぜと呼ばれるようになった
- 第2波は同年秋、世界的に同時発生してさらに重い症状を伴うものになった
- 第3波は1919年春に起こり、同年秋に終息に向かった

#### ・ ウィルスのタイプ

A型。当時はウィルスが原因とは知られておらず、後の血清疫学調査や剖検肺や凍土中の患者肺からのRNAの解析で判明した。

#### ・ 罹患患者・死亡者

- この間、世界の人口の約50%が感染し、25%が発症したと見積もられている
- 死亡者は2千万人以上（\*中村注：一説によると4千万人～8千万人）にのぼり、疫病史上有数の大被害となった
- 米国では南北戦争の死亡者や第2次世界大戦の死亡者を大きく上回り、パンデミックの脅威をまざまざと見せつけた
- 人口の多くがその免疫を獲得するにつれて死亡率は低下したが、1957年にアジアかぜが現れるまで流行し続けた

#### ・ 日本では

- 1918年（大正7年）の11月に全国的な流行となった
- 1921年7月までの3年間で、人口の約半数（2,380万人）が罹患し、38万8,727人が死亡したと報告されている

#### ・ その他の特徴

- 20代から30代の青壮年者に死亡率が高かった原因は不明で、謎として残っている

- 通常は小児や高齢者の死亡率が高い。死因の第一位は二次的細菌性肺炎であった
- このとき、始めて剖検肺中に細菌が証明されないことから、ウィルス肺炎が疑われるようになった

#### 新型ウィルスの特徴

- ・ 感染しやすい
- ・ 毒性が強い（強毒性）

#### 感染状況の6段階とは？

段 階	状 況	リ ス ク
第1段階	動物間に新しい型のウィルスが存在するがヒト感染なし	ヒトーヒト感染リスクは低い
第2段階	動物間に新しい型のウィルスが存在するがヒト感染なし	ヒトーヒト感染リスクはより高い
第3段階	新しい型のウィルスが存在によるヒト感染が発生	ヒトーヒト感染はないか又は限定的
第4段階	新しい型のウィルスが存在によるヒト感染が発生	ヒトーヒト感染が増加している証拠あり
第5段階	新しい型のウィルスが存在によるヒト感染が発生	かなりのヒトーヒト感染の証拠あり
第6段階	人から人への世界的流行の発生	効率よく持続的にヒトーヒト感染が確立

- ・ 第4段階から第6段階への移行は加速度的になると想定される。
- ・ WHOの最新状況 = フェーズ3（第3段階）

#### 新型インフルエンザの流行予想

- ・ 流行規模

区 分	全世界	国 内	東 京
人 口	63 億人	1 億 2,800 万人	1,265 万人
発症率	25%	25%	30%
死亡者	-	64 万人	1 万 4,100 人
試 算	WHO	厚生労働省	東京都

- ・ 流行周期

1年以上にわたり、複数の流行の波が予想される（スペインかぜのときは3波）

#### 症状

実際に発生していないため、詳細は分からないが鳥インフルエンザ感染事例から以下のような症状が想定される。

- 普通の風邪のような症状
- 下痢

- 急激に進行する肺炎
- 臓器不全
- 結膜炎

#### 個人・家庭レベルでの対応

- ・ 新型インフルエンザに対する対策は通常のインフルエンザ対策の延長線上にあると考えられている
  - 通常のインフルエンザは飛沫（感染した人の咳、くしゃみ、つばなどで放出されたウィルス）によって感染する
  - 熱、咳、くしゃみ等の症状のある人には必ずマスクを着けてもらう
  - 感染の疑いがあるような人と接する時にはマスクを着ける
  - 咳やくしゃみをおさえた手、鼻をかんだ手は直ちに洗う
  - 外出後のうがいや手洗いを日常的に行う
  - 流行地への渡航、人混みや繁華街への外出を控える
  - 十分に休養をとり、体力や抵抗力を高め、日頃からバランスよく栄養をとり、規則的な生活をし、感染しにくい状態を保つ
  - 「咳エチケット」
    - 咳・くしゃみの際はティッシュなどで口と鼻を押さえる
    - くしゃみなどは他の人から顔をそむけ1 m以上離れる
    - 鼻汁・痰などを含んだティッシュなどはすぐに蓋付きの廃棄物箱に捨てる
    - 咳をしている人にマスクの着用を促す
    - マスクはより透過性の低いものが望ましいが、通常の市販マスクでも効果がある
    - マスクを着用しているからといって、ウィルスの吸入を完全に予防できるわけではない
    - マスクの装着は説明書をよく読んで、正しく着用する
- ・ 麻疹（はしか）や通常のインフルエンザ等、発熱性の疾患については法に基づく予防接種を行い、新型インフルエンザとの重複感染を予防すること
- ・ 新型インフルエンザは、何時起こるかは誰にもわからず、また起こったときにどうなるかも誰にも分からないので、重大な被害が起こることを想定して、今できることを準備しておく（食料の備蓄、日用品、マスク・うがい薬、キャッシュフロー等災害時に想定されるもの）

#### 家庭においてパンデミックになったときの対応

- ・ 新型インフルエンザが日本国内や地域で広がり始めた時には、それらの影響を最小限に食い止めるために、
  - 感染した場合の自主的自宅待機
  - 同居家族の誰かが感染した場合の、他の家族メンバーの自主的な自宅待機
  - 一定期間の学校の閉鎖
  - 集会等の延期
  - 地域での人と人との接触機会を減らすために外出を控える
- ・ 勤務先の企業や団体が事業を継続するため、あるいは事業所内での感染拡大を抑えるために、時間差勤務

## 電話会議

### 交代勤務

などの対策が考えられる。

- ・ パンデミックは日本だけのものではなく、海外でも同時に発生するので、海外で大流行すれば輸入が減少したり停止することによって、種々の生活必需品が入手できなくなる可能性がある
- ・ 一定期間自宅待機になった場合、こどもの学校が長期に休みになった場合、また勤務状況の変更が余儀なくされた場合などで、どのように家庭内で役割を分担し家庭を維持していくか、などについて各家庭で計画を立てておくこと
- ・ 突然仕事を休まねばならなくなった時の連絡についても勤務先と相談しておく
- ・ パンデミックになると、感染を防ぐためには不要不急の外出をしないことが原則
- ・ 災害時と同様、外出しなくても良いだけの最低限（2週間程度）の食糧・日用品等は準備しておく

### 参考になる情報（主なもの）

- ・ 厚生労働省：「新型インフルエンザ対策ガイドライン(フェーズ4以降)」について(2007.3.26)  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou04/09.html>
- ・ 厚生労働省：新型インフルエンザパンフレット・カードゲーム  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou04/pdf/14.pdf>
- ・ 東京都：「東京都新型インフルエンザ対応マニュアル」(2007.3)  
[http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryo/kansen/infuruenza/files/influ\\_manyual.pdf#search=](http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryo/kansen/infuruenza/files/influ_manyual.pdf#search=);  
新型インフルエンザ 東京

以 上